

吉田町郷土誌





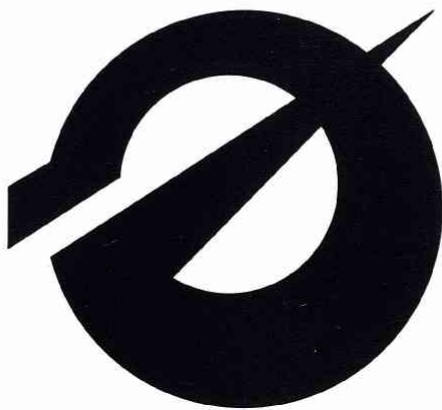




吉田町郷土誌



# 吉田町町章



この町章は、太陽国体開催を記念して、昭和46年7月に制定された。

「よしだ」の「よ」の字を図案化したもので、円形は町の安定と町民の和を表し、右に伸びる一本の爪は町の発展と向上・意欲をあらわし、躍進吉田の象徴とした。





## 町木・町花

「もくせい」

吉田に古くから植栽され、十月の花として親しまれ、朝や夕方は特によく匂って、住む人に安らぎを与えてきた。木もれ陽の金色が黒土にこぼれ、その黄金にかさねて、もくせいの黄金がこぼれる。まさに、緑に包まれた吉田の木精である。※花ことば・謙遜（昭和四十六年指定）



木 犀

## 吉田町民憲章

わたしたちは、吉田町民であることに誇りと自覚をもち、みんなで住みよい町をつくるため、この憲章を定めます。

### 一、健康

わたしたち吉田町民は、心とからだをきたえ健康な町をつくります。

### 一、勤勉

わたしたち吉田町民は、みんなよく働き豊かな町をつくります。

### 一、協力

わたしたち吉田町民は、心をあわせ美しい町をつくります。

### 一、教育・文化

わたしたち吉田町民は、教育をすすめ伸びゆく町をつくります。

### 一、平和

わたしたち吉田町民は、きまわりを守り明るい町をつくります。





東・西佐多浦地区





本城地区





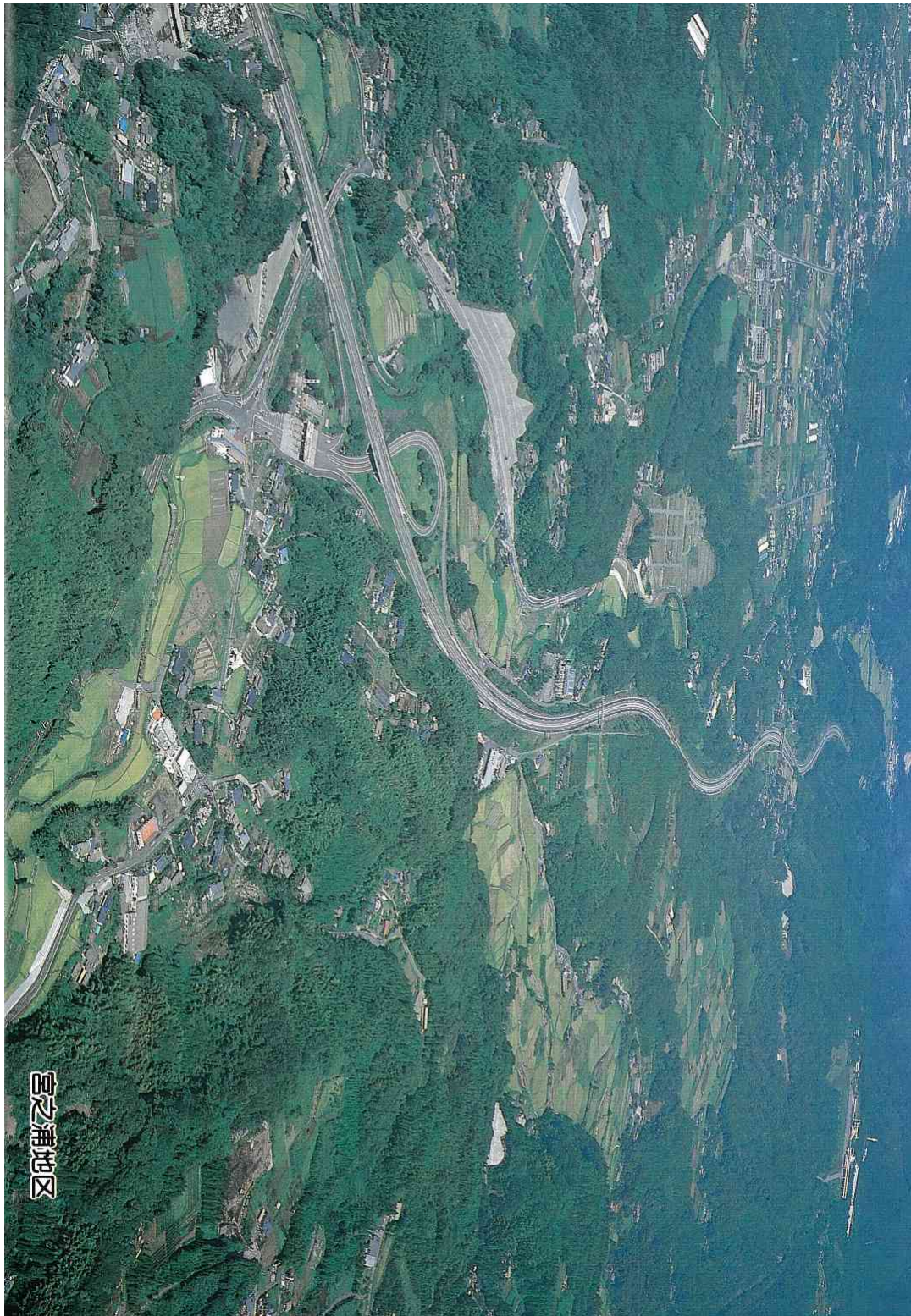
本名前・後地区





大原地区





宮之浦地区





牟礼乡地区



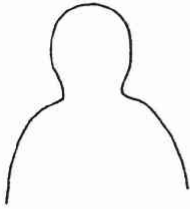
吉田町役場付近



吉田町総合運動公園

歴代村長

歴代村(町)長・議長



2代  
重田源之丞



初代  
坂元正晃



5代  
梶原恒太郎

就任明治36. 6. 18  
退任明治40. 6. 1



4代  
後藤祐義

就任明治34. 4  
退任明治36. 4



3代  
川田國彦



8代  
堂園義彦

就任大正1. 9. 30  
退任大正2. 9. 17



7代  
久松藤藏

就任明治42. 7. 23  
退任大正1. 8. 12



6代  
伊地知徳之助

就任明治40. 6. 18  
退任明治42. 5. 19



11代  
深見國二

就任大正7. 12. 15  
退任大正11. 4. 27



10代  
城脇助左衛門

就任大正3. 12. 15  
退任大正7. 12. 14



9代  
外園三次郎

就任大正2. 10. 13  
退任大正3. 10. 9



15代  
柴山正籌

就任昭和10. 5. 2  
退任昭和12. 4. 3



14代  
森田休兵衛

就任昭和6. 5. 2  
退任昭和10. 5. 1



12代~13代  
下田平六左衛門

就任大正11. 4. 28  
退任昭和6. 4. 3



19代~20代  
橘公監

就任昭和22. 4. 5  
退任昭和30. 4. 30



17代~18代  
上霧勸左衛門

就任昭和16. 5. 26  
退任昭和21. 11. 30



16代  
梶原景藏

就任昭和12. 5. 25  
退任昭和16. 5. 25





23代  
外園 郁也

就任昭和38. 5. 1  
退任昭和42. 4. 30



22代~24代  
安田 義則

就任昭和34. 5. 1  
退任昭和38. 4. 30  
就任昭和42. 5. 1  
退任昭和46. 4. 30



21代  
山下 景由

就任昭和30. 5. 1  
退任昭和34. 4. 30



町長 3代~  
大角 純徳

就任昭和54. 4. 27  
(現在に至る)



村長 25代  
西園 暁

就任昭和46. 5. 1  
退任昭和47. 10. 31  
町長 初代~2代  
就任昭和47. 11. 1  
退任昭和54. 4. 26



3代、17代  
山方 清

自 昭和24. 6. 12  
至 昭和25. 2. 27  
自 昭和60. 5. 1  
至 平成元. 4. 24



初代~2代  
楠田 重憲

自 昭和22. 5. 1  
至 昭和24. 6. 11

歴代町長

歴代議長



9代~10代  
提水流 敬 藏

自 昭和34. 4. 25  
至 昭和40. 4. 24



5代、7代~8代  
上野 繁 藏

自 昭和28. 5. 8  
至 昭和30. 6. 10  
自 昭和30. 12. 11  
至 昭和34. 4. 1



4代、6代  
山口 義 彦

自 昭和25. 4. 10  
至 昭和28. 4. 24  
自 昭和30. 6. 11  
至 昭和30. 12. 10



15代  
武田 功

自 昭和52. 4. 25  
至 昭和56. 4. 24



13代~14代  
湯 脇 重 男

自 昭和46. 5. 13  
至 昭和52. 4. 24



11代~12代  
窪 園 忠

自 昭和40. 4. 28  
至 昭和46. 4. 11



18代  
寺 師 幸 男

自 平成元. 4. 26  
(現在に至る)



16代  
内 村 巽

自 昭和56. 4. 25  
至 昭和60. 4. 24

# 吉田町町民歌

作詞／蓑手重則 作曲／鎌田範政

♩ = 100  
おおらかにmf



(1)あ さぞらきよ く てー りーはえー てあ おーぐやさしい



むれーがお かー みどりのーさとにきょうもまた おいも わかきも



せいっぱい い きるよし だのわ たーしたちー (2)

一、朝空清く 照り映えて

仰ぐやさしい 牟礼が岡

みどりの里に きょうもまた

老いも若きも せいっぱい

生きる吉田の わたしたち

二、思川おもいの流れ ひとすじに

みおやの教え 受けついで

心を見がき 身をきたえ

みんな仲よく 助けあい

励む吉田の わたしたち

三、野を越え 丘をつらぬいて

夢もふくらむ ハイウエイ

文化は花と 咲くところ

のぞみ大きく たくましく

伸びる吉田の わたしたち

# 吉田音頭

作詞／高城俊男

作曲／土肥寛展



- |   |   |
|---|---|
| <p>三、<br/>句う木せい<br/>広がる文化<br/>吉田研修の<br/>虹のさと<br/>語りかけそな<br/>田の神さあを<br/>のぞくあの娘の<br/>願いごと<br/>(くりかえし) ソレ</p>    | <p>一、<br/>あれさ三重岳<br/>朝日に映えて<br/>吉田千里は<br/>花がすみ<br/>いきな手さばき<br/>あの棒踊り<br/>石の仁王さんも<br/>見てござる<br/>ソレ</p> |
| <p>四、<br/>旅のつばめも<br/>見とれて惚れる<br/>ここは吉田の<br/>ハイウェイ<br/>こころ合わせて<br/>あしたの町を<br/>築く笑顔の<br/>総踊り<br/>(くりかえし) ソレ</p> | <p>二、<br/>思い川風<br/>たもとに入れて<br/>しのぶ城あと<br/>なつかしや<br/>運動公園<br/>ふれあい広場<br/>交わす笑顔に<br/>光る汗<br/>ソレ</p>     |

## 発刊のことば



吉田町長 大角 純 徳

本町では平成四年に町制施行二十周年を迎えることになり、その記念事業の一環として、永年懸案でありました郷土誌刊行を計画いたしました。この程予定どおりの発刊を見ましたことは、まことに慶びにたえません。

本町は町制施行以前においては、人口減少率一三％という過疎の村でありましたが、昭和四十四年に県教育センターが建設され、その後も次々と県の大規模教育研修施設が本町に設置され、更には九州高速縦貫自動車道の開通もあり、これらが本町のイメージアップとなり、一躍脚光を浴びるに至りました。

このため平成二年国調では、人口増加率が県内第一位の一七・三％に達し、昨年末には念願の人口一万人を超えることができ、今後更に急増の状況にあります。このことは、地域活性化、町勢発展のために大変よろこばしいことであります。

私どもは町制施行二十周年の記念すべき節目に当たり、先覚者の足跡をたどり、郷土の歴史、



先人の生活や業績を知り、正しく後世にその貴重な文化遺産を継承するとともに、明日への町勢発展への指針とすることは、意義深いものと思います。

また、私も先人に勝るとも劣らぬバイタリティと情熱をもって、これから二十一世紀に向けての新たな飛躍発展を遂げるための強固な基礎固めに、全身全霊を捧げて取り組まねばならぬと思う次第であります。

郷土誌執筆を始めてから丸三カ年間で、連日精力的なお取り組みをされ、並々ならぬご苦勞をいただいた委員の皆様や貴重な資料を提供されました方々に心からの感謝と敬意を表する次第であります。

なお、特別執筆をお願いしました鹿児島県考古学会会長河口貞徳先生、鹿児島短期大学学長三木靖先生、編集校閲をお引受け下さった成尾昌子先生に深甚の敬意を表します。

終わりにこの郷土誌が、町民各位に愛読され、本町の産業、経済、教育文化、保健福祉、観光の振興等あらゆる面で広く利用され、一層の本町発展のために貴重な資料となるよう念願申し上げます。

平成三年三月

## 発刊に寄せて



吉田町教育長 黒岩 五大

このたび、町制施行二十周年という意義深い年を迎えるに当たり、これを記念して町民の待望久しかった「吉田町郷土誌」が刊行されますことは、まことに喜びにたえないところであります。

昭和六十三年四月、吉田町郷土誌編纂委員会が発足して三年、県考古学会会長河口貞徳先生、鹿児島短期大学学長三木靖先生、郷土誌執筆委員の瀬戸山秋夫、大井節、上野静雄、川崎正孝、東英雄、諸先生方の心血を注いでのご執筆により、予定どおり刊行の運びとなつたのであります。この間、貴重な資料をご提供くださいました多くの町民の方々に、心からお礼を申し上げます。

数千年の間、土に埋もれた遺跡を探し、草深い山野に旧跡を訪ね、苔を落として古碑の刻字を拾い、散逸した史料を探し求め、僅かに残された記録をたどり、消え失せようとする民具を訪ねて、本誌は編集されました。

この「郷土誌」には、石器時代の太古から現代に至るまでの悠久な年月に亘って、吉田町がいかにして生成発展してきたかという、歴史の流れが記録されており、そこには我々の祖先が生き

るために、あらゆる障害に耐え、困難を克服して、新しい生活を求めて、たゆみない努力を続けてきた血と汗と涙の結晶がこめられています。

「歴史とは、過去と現代との対話である。」といわれますが、この「郷土誌」をとおして、我々は先人と語り、先人の心を知ることができます。さらに、先人への思慕の情と郷土への愛情の念が湧いてくるのであります。

歴史は、悠久な過去から現在へ、そしてまた、久遠の未来へと発展していきます。過去は現在の母胎であり、現在は未来の基盤であります。「温故知新おんこちしん—故きを温ねて新しきを知る」ということばが示すように、郷土の過去を学んで、現在の由来を知ることによって、現在の吉田町を将来に向かつて大きく発展させ、更に豊かな未来を切り開いていく意欲と勇氣と創造力が生まれることを期待してやみません。

この「吉田町郷土誌」が、町民の方々に広く愛読され、遠く郷里を離れている人々にも親しまれ、二十一世紀に真向う愛郷心をはぐくみ、郷土発展の一助となることを切に願うものであります。

平成三年三月

# 目次

発刊のことば	吉田町長	表紙題字	大角純徳町長
発刊に寄せて	吉田町教育長	黒岩五大	

## 第一編 自然の姿

第一章 位置・面積	1
第一節 位置	1
第二節 面積	1
第二章 地勢・地質	3
第一節 地勢	3
第二節 地質	4
第三章 気候・風土・生物	14
第一節 気候・風土	14
第二節 生物	18
第四章 人口と世帯数	19
第一節 本町の人口	19

## 第二節 人口・世帯数の構成

第五章 自然の利用	24
第一節 土地の利用	24
第二節 水の利用	24

## 第二編 大昔の吉田

第一章 概説	27
第一節 日本の近代考古学	27
第二節 鹿兒島における考古学の歩み	33
第三節 弥生式土器	60
第四節 古墳	66
第五節 旧石器	75

第六節	自然と先史時代	76
第二章	吉田町の遺跡	85
第一節	大原遺跡	85
第二節	小山遺跡	96
第三節	その他の遺跡	110
第四節	むすび	120
第三章	古代	123
第一節	先史から古代へ	123
第二節	律令制国家の成立	126
第三節	租庸調	132
第四節	大隅国の成立	140

### 第三編 中世 (吉田氏の時代)

第一章	中世の成立	147
第一節	租庸調制の性格	147
第二節	庸調制の動揺	148
第三節	郡郷院制の成立	149
第二章	大隅正八幡宮とその所領	151
第一節	鹿兒島神宮	151
第二節	八幡信仰	154
第三節	大隅正八幡宮領の性格	155
第四節	島津荘	156
第五節	吉田の登場	157
第三章	所領としての吉田	158
第一節	所領の形成	158
第二節	所領の確立	159
第三節	図田帳にみる吉田	162
第四節	地頭	167
第五節	まとめ	169
第四章	中世前期の吉田氏	170
第一節	吉田氏以前と息長氏	170
第二節	歴代の吉田氏	171
第三節	吉田氏の非御家人化	172
第四節	吉田氏の三代目から五代目	173
第五節	鎌倉時代の吉田氏	174
第五章	元寇と吉田	176
第一節	元寇	176

第二章	大隅国石築地役配符案	179
第六章	中世中期の吉田氏	181
第一節	吉田氏の六代目から九代目	181
第二節	吉田氏の十代目から十四代目まで	183
第七章	中世後期の吉田	186
第一節	大永三年から文禄四年までの吉田	186
第二節	吉田城の城主	193
第八章	吉田の中世城館	194
第一節	中世の城郭	194
第二節	吉田の城館	197
<b>第四編 近世</b>		
第一章	吉田郷と村	207
第一節	吉田郷の成立	207
第二節	村と門	208
第二章	藩政期の人口	209
第一節	全国、九州、島津藩	209
第二節	吉田郷の人口と家部	211

第三章	藩政期の石高	211
第一節	石高	211
第二節	吉田郷の石高と特産物	213
第四章	外城と郷士	214
第一節	島津藩の地方組織と身分制度	214
第二節	吉田の麓	215
第三節	吉田の郷士	219
第五章	吉田の生活	220
第一節	農業生活	220
第二節	往来	221
第三節	宗教	225
<b>第五編 明治以後の吉田</b>		
第一章	行政	227
第一節	藩籍奉還	227
第二節	常備隊	227
第三節	戸籍	228
第四節	名字(苗字)	229



第五節	徴兵令	230
第六節	戸長制と区制	231
第七節	吉田村制施行	238
第八節	吉田町制施行	238
第九節	行政の組織・機構	240
一	歴代村長・町長名	240
二	村・町役場移転と改築	240
三	役場機構	241
四	行政委員会	245
第二章	選挙・議会	248
第一節	選挙制度	248
一	選挙制度の変遷	248
二	町(村)議会議員の定数と議員	252
第二節	議会制度	256
第三節	議会の構成	259
第四節	議決事項	264
第五節	県会議員と国会議員	270
第三章	財政	273
第一節	地租改正	273

第二節	明治期の町村財政	278
第三節	昭和期の町村財政	282
一	昭和初期の財政	282
二	戦時下の財政	286
三	戦後の財政	286
第四章	産業・経済・観光	291
第一節	産業・経済の動向	291
一	産業別就業者数と生産所得	291
二	農業	294
(一)	自然条件	
(二)	土地及び人口の推移表	
(三)	農業経営の推移	
(四)	農業の現状	
(五)	農機具	
(六)	稲作	
(七)	麦作・その他	
三	農業団体・農業改善事業等	336
(一)	農業団体	
(二)	農地改革	

(三) 耕地整理と土地改良	372
四 林業	372
(一) 林業の概要	
(二) 林政の沿革	
(三) 林産物	
(四) 植林事業の功績者	
五 畜産	398
六 養鶏・その他の家禽類	402
七 水産業	404
八 商業	406
(一) 商業の移り変わり	
(二) 吉田の商業	
(三) 吉田町商工会	
(四) 金融機関	
九 鉱・工業	418
第二節 開発・観光	423
第五章 土木・建築	436
第一節 土木	436
一 河川	437

二 用水路の開削	452
三 トンネル	455
四 道路	459
五 治山事業	464
第二節 建築	466
一 公共建築	466
(一) 役場庁舎	
(二) 学校建築	
(三) 町営住宅	
二 民家	475
(一) 昔の民家	
(二) 昭和の住宅の移り変わり	
第六章 交通・通信・電気	481
第一節 交通・運輸	481
一 昔の道筋	481
二 明治以後の道路	487
三 橋とトンネル	500
第二節 交通機関の発達	507
一 昔の交通	507

二 明治以後の交通機関	508
第三節 通信	516
一 郵便	516
二 電信・電話	524
第四節 電気	530
第七章 保健・衛生・福祉	540
第一節 保健衛生	540
一 保健衛生行政の沿革	540
二 公衆衛生	544
三 医療機関	557
四 栄養改善と食生活改善	561
五 環境衛生	572
六 国民健康保険	582
第二節 社会福祉	590
一 社会福祉制度の変遷	590
二 社会福祉事業の実際	593
第八章 教育・文化	620
第一節 教育	620
一 学校教育	620

二 社会教育	683
(一) 青少年の教育	
(二) 婦人教育	
(三) P・T・A(父母と教師の会)	
(四) 高齢者教育	
(五) 各種学級・教室・講座	
(六) 本町の社会教育施設	
(七) 社会体育	
第二節 文化	741
一 文化財	741
(一) 指定文化財	
(二) 周知の文化財	
(三) 郷土芸能	
二 文化団体	774
三 風俗	777
(一) 年中行事	
(二) 人の一生(人生儀礼)	

(三) 昔の遊び	
(四) 講	
四 生活の移り変わり	795
(一) 戦前の生活	
(二) 戦時下の衣・食生活	
(三) 戦後の生活	
(四) 節目における村(町)民の生活	
五 町内の史跡と伝説	821
第三節 教育行政	837
一 教育行政の移り変わり	837
(一) 戦前の教育行政	
(二) 教育系統図と教育年表	
(三) 学校財政	
(四) 教育委員会	
二 その他	862
(一) 児童・生徒数の変遷	
(二) 教育振興会	
第九章 警察・消防・交通安全	864
第一節 警察	864

第二節 消防	871
第三節 交通安全	880
第十章 軍事	885
第一節 薩摩藩の軍政改革	885
第二節 戊辰の役	886
第三節 西南の役	888
第四節 日清戦争	898
第五節 日露戦争	900
第六節 日中戦争(日華事変)	905
第七節 太平洋戦争	908
一 概況	908
二 郷土部隊	909
三 戦時下の暮らし	913
四 大東亜戦争慰霊塔(戦没者名簿)	918
五 吉田村(町)遺族会	930
第十一章 宗教	932
第一節 神社	932
第二節 寺院	935
第三節 その他の宗教	937

資料編

第二章 その他

第一章 本文関係	939	一 教育施設	1037
一 第一編 第三章 第二節	939	鹿児島県総合教育センター	1037
吉田町の植物・動物	939	鹿児島県青少年研修センター	1037
二 第四編 第五章 第二節	1015	鹿児島県職員研修所	1044
齊興公の吉田郷通過	1015	二 太平洋戦争復員者	1044
三 第五編 第六章 第一節	1019	三 吉田の方言	1067
昭和初期の道路・町道・町道橋	1019	四 町内の地名	1071
四 第五編 第六章 第二節	1028	五 字名・字図	1073
年次別自動車保有数	1028	六 吉田町年表	1083
五 第五編 第八章 第一節	1030	七 吉田町地質図	1101
新制中学校	1030	編集後記	
六 第五編 第八章 第二節	1032		
吾職農也	1032		
宇都谷開墾地と桐野利秋	1035		
七 第五編 第十章 第三節	1035		
久松藤雄・古木保彦の略伝	1035		